じめ意図的，計画的に位置づけておき，その場で個を認める働きかけをする，ということである。

例えば，

○　子供の発表をよく聞いてやり，その発表を生かすようにする。内容が十分でない発表に対しては，適切なヒントを与えるなどして，正しい答えを導き出させ，成功感，成就感を味わわせた上で，賞賛したり励ましたりする。

○　机間巡視の指導の中では，良い結果を取り上げて認めてやる。また，問題解決につまずいている子供，困難を感じている子供には，適切なヒントを与えて解決に導いてやり，その成果を認めてやる。

○　個に応じて，やや程度の高い発問をし，教師との対話の中から正答を生み出させ，成功感，成就感を味わわせた上で，賞賛したり励ましたりする。

○　内向的な子供に対しては，机間巡視の際，とくに語りかけるようにし，良い内容の答えが得られた場合は，賞賛してやり，発表の機会を与えるようにする。

○　外向的な子供に対しては，きびしく指導する。

○　子供の反応や活動の結果は，細かに観察し，努力の結果を認めてやる。

このようにして，ただ単に，ほめたりしかったりするのではなくて，教師と子供との人間的なふれ合いの中で，どの子供にもまんべんなく意図的，計画的に，個を認める働きかけを継続してゆけば，これがきっかけとなって，子供の学習意欲は高まるであろうと考え，次の解決策を考えた。

研究主題の解決策

(1) 前提条件

①　一人一人の子供の性格と学力とを把握し，個を生かすために，下記の資料を活用する。

- Y-G 性格検査
- 学　力　検　査
- 知　能　検　査
- 前学期の成績
- 事前テストなど

②　授業の中で，子供の主体的な活動の時間をできるだけ多くとり，教師はその間個別指導に努める。

(2) 解　決　策

授業ごとに，あらかじめ3～4人の子供を決めておき，その子供たちを授業の中で「認める」場を意図的，計画的に設定し，短時日のうちに，少なくとも1回は，どの子供も「認める」ようにする。

このことを，継続して行う。

Ⅳ 研 究 計 画

この解決策の効果を判定するための計画は次のとおりである。

1．この解決策を，小学校の国語と算数の授業におろして，その効果を判定する。

研究協力校　国語　1校
　　算数　1校
研究協力員　各校　教諭2名

2．実　験　期　間

昭和55年9月上旬～11月下旬

この期間に，国語，算数ともに，3回の授業研究を実施し，個に応じた，教師の個を認める働きかけのあり方について研究し，その成果を，以後の授業に生かすようにする。

なお，この授業研究は，観察の観点を明示した「2－1－2方式の授業研究」（福島県教育センター紀要第39号）によって行う。

3．一人一人の児童の性格と学力とを知るために，「個別指導資料（資料1）」を9月までに作成しこれを活用する。これは，個人ごとのY－G性格検査，学力検査，知能検査，前学期の成績等を記録したカードである。

4．実験期間中は，「個別指導記録表」（資料2）によって，個を認める働きかけを行った児童を記録してゆく。

5．解決策の効果（学習意欲の変容）は，次の①，②，③を、いずれも実験前（9月上旬）と実験後（12月上旬）に実施し，前，後の結